

「第五回日銀グランプリ 『キャンパスからの提言』」 の決勝開催

▼日本銀行では、昨年十二月五日、大学生を主な対象とする金融経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第五回日銀グランプリ」キャンパスからの提言」の決勝を本店において開催しました。今回のテーマは、「わが国の金融を巡る課題と処方箋」。わが国の金融を巡る課題を取り上げ、それに対する具体的な処方箋を提案してもらいました。全国から過去最高となる一二編もの多数の論文が寄せられ、応募要領に沿った一次審査の結果、五チーム（名古屋

大学法学部、早稲田大学商学部、明治大学商学部、慶應義塾大学経済学部・同理工学部・同商学部、東京経済大学経済学部）が決勝に進出しました。また、惜しくも決勝進出には至らなかったものの、決勝進出チームに次ぐ上位にランクされた八チーム（中央大学、早稲田大学、東京大学（二チーム）、同志社大学、成城大学、一橋大学、広島市立大学）を「佳作」に選定させていただきました。

▼決勝当日は、日本銀行本店において、決勝進出チームがそれぞれ一五分間のプレゼンテーションを行った後、審査員からの質問に答えるというかたちで進められました。

た。審査員には、小島邦夫氏（経済同友会専務理事）、藤沢久美氏（シンクタンク・ソフィアバンク副代表）をお招きしたほか、日本銀行から西村清彦副総裁（審査員長）、須田美矢子、中村清次両政策委員会審議委員が参加しました。審査終了後、審査員長から、「回を重ねるにつれ、採り上げるテーマの幅が広がるなど、全体としてレベルアップしてきている」「特に決勝に

残った作品は、わが国の金融に関する課題に関し、問題意識を持つたうえで、自分たちで考えた独自性ある提言に結びつけている点が良いかった」との総評がありました。

▼厳正なる審査の結果、最優秀賞には、明治大学商学部チームの「オープンソース方式による資産運用アドバイス・サイトの構築」が選ばれるなど、「アドバイザの質を担保するため、テストを受験、事後評価を行うなど、実現のためのアイデアを具体的に示した」「提案内容をイメージした具体的で分かりやすい資料を作成し、実現に



審査員からのするどい質問に学生はタジタジとなる場面も



審査員からの質問にも丁寧・誠実に回答

向けて取り組んでいく姿勢が示された」点などが高く評価されました。このほか優秀賞二チーム、敢闘賞二チームを、以下の通り選出しました。五チームの作品全文および審査員の講評は、日本銀行HPに掲載されています。

<http://www.boj.or.jp/type/release/adhoc09/grand0912b.htm>

【最優秀賞】

●明治大学商学部チーム

「オープンソース方式による資産運用アドバイス・サイトの構築」
「中立的で個別的なアドバイス」

【優秀賞】

●慶應義塾大学経済学部・同理工学部・同商学部チーム



各チームによるプレゼンテーションの様相



最優秀賞に輝いた明治大学商学部チームと審査員の皆さん

「ECOMOカードが日本を救う」
「クレジットカードを利用した環境ビジネスへの投資スキーム」
●東京経済大学経済学部チーム
「ESCO事業を利用した環境金融の育成」

【敢闘賞】

●名古屋大学法学部チーム
「中小企業M&A事業承継を活性化させる新システムの提案」
「事業承継準備シート」
●早稲田大学商学部チーム
「金融経済教育ビッグバン」
「金融経済教育導入室および『日本版シチズンシップ』の導入」

▼「日銀グランプリ」キャンペーンからの提言」は、来年度も開催する予定ですので、全国の大学などで学ぶ皆さんには引き続き、斬新でユニークな発想に基づき挑戦していただけることを心から期待しています。

「日本銀行へようこそ」 「日銀を紹介するタベ」等の開催

▼日本銀行本店では、昨年十二月二十一日、二十二日、二十四日および二十五日の四日間、藤原作弥氏（元日本銀行副総裁）ほかによる「市民講座」を中心とした催事「日本銀行へようこそ」日銀を紹介するタベ」を実施いたしました。二十二日夕刻に開催された「市民



藤原作弥氏の市民講座の模様

講座」では、「ジャーナリストと『フクソー』（副総裁）の間で」という演題で、藤原作弥氏が、お集まりいただいた約二〇〇名の方々に前に、日本銀行副総裁に就任した経緯や副総裁時代の経験などについて講演しました。一時間という短い時間ではありましたが、参加された方々にご好評をいただくことができました。

▼二十一日、二十四日、二十五日の「市民講座」では、「にちぎん入門」日本銀行の役割と仕事」「お



情報サービス局長による市民講座の模様

札の話」「景気の見方」をテーマに、それぞれ実際に事務に携わっている本行職員が自らの知識や経験を活かしながら、写真や図などを使って分かりやすくご説明させていただきました。ご参加された方には、講座終了後、本店本館の地下金庫などをご案内いたしました。通常の見学ツアーではご案内していない地下金庫内の小部屋にお入りいただき、一千億円分の模擬券のバックなどを間近にご覧いただいたり、屋外灯のともった日銀本館の中庭の風情を楽しんでいただ

編集後記

■今回の「扉を開く」では、地域の方たちと一緒に文化財を「味わい尽くす」さまざまな工夫をされている九州国立博物館の三輪館長のお姿が、とても新鮮で感動的でした。私は今まで、博物館をアカデミックな文化財を保存・展示している場所としか見ていませんでした。けれども、考えてみれば、収蔵物のうちのかなりの部分は、それぞれの時代の人たちの生活に密着した「日用品」や「道具」であるわけですから、それらを使って楽しむ方法がいろいろとあるのも当然なのかもしれません。もうひとつの連載企画である「地域の底力」で今回取材させていただいた早稲田商店街で伺った話もそうですが、いかに地元の方々に関心を持ってもらい、共通の目標に向かって共に努力していくかが、地域で成功する鍵となる、との印象を持ちました。(河野)

■緑豊かな山奥にそびえ立つ九州国立博物館。ロビーは繊細なガラス張りの壁面からたくさんの自然光が入り、吹き抜けの天井は高く開放感に満ちあふれていました。他のアジア諸国の博物館のモデルになるほど美しいと言われるのもうなずけます。またここでは修復用CTスキャンを備えた文化財保存修復施設を見学することができます(事前予約制)。取材当日は、虫食いで穴が空いた巻物の修復作業が行われていました。巻物と同質の紙を作り、虫食いの穴をスキャンして、その大きさに合わせた紙を一つ一つ丁寧に穴埋めしていく、気の遠くなるような作業です。貴重な文化財は陰の努力と最先端の技術によって保護され、後世に受け継がれていくのです。(MK)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(<http://www.boj.or.jp/type/pub/nichigin.htm>)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解については、日本銀行ホームページ(<http://www.boj.or.jp/>)をご覧ください。

にちぎん 2010年 春号
編集・発行人 河野圭志
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎ 03-3277-2405

デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社美松堂
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

※本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

▼日本銀行では、今後も皆さまのお役に立てるような催事を実施してまいりますので、ご参加いただければ幸いです。なお、日本銀行では、通常の見学ツアーを平日の日中に開催しております。事前のお申し込みをいただければ、随時ご参加いただけますので、併せて

くなど、いつもとは一味違った見学ツアーを体験していただきまして。お勤め帰りの方にもご参加いただける時間帯であったこともあり、幅広い年齢層の方々にお楽しみいただくことができました。



日本銀行本店本館の中庭

皆さまのお越しをお待ちしております。
*日本銀行見学ツアーの詳細は、日本銀行HPをご覧ください。

<http://www.boj.or.jp/type/etc/service/anaio3.htm>

▼日本銀行では今回の催事に合わせ、ECO EDO 日本橋実行委員会等による「年の瀬日本橋二〇〇九ECO EDO 日本橋グリーンプロジェクト」と銘打ったイベントに参加しました。このイベントは、グリーン電力(太陽光・風力・バイオマス等の自然エネルギー)の認知度向上等を目的とする「グリーン・クリスマス・ライトアップ」に参加するもので、日本橋地区にある三つの重要文化

財「日本橋」「日本銀行本店本館」「三井本館」と「日本橋一丁目ビルディング(コレド日本橋)」を、緑色の照明でライトアップしました。「日本橋」と「日本銀行本店本館」を緑色にライトアップするのは初めての試みでした。



美しく幻想的にライトアップされた日本銀行本店本館